

歌謡百人選

月





卷之二

思田庵あせと進む



みに於のいはくとおもひのさありあひ進ひゆる
はすと自ののまへ御草のねりと達付へる、す
首吊り立ての船橋紫の沖とありす、時事
立身の者内にうす御氣すりく事おほす御都主
以無とぞ御、が御とぞくあ後小少の際せら
そとぞくしけりとくとおもひとくとくと
おもひとくとくとくとくとくとくとくと
おもひとくとくとくとくとくとくとくとくとく

後半船が北風、書くこゝの頃は北風
ノリナリハ後邊の帆のふるえオモシロア
ヨリ引てまよあ上にす。ひたり内妙思少の
ウキギルメく帆うきもすの少のと多いのを
シテシテア **船長** もり船能キルヒタ船やれ
湯づてとくきわらびとせはまに前門の即
ちまほの海小舟ともとばかり。我ふとも
もじかく船をひくとうけのうりんすば
掛く船の思はかどふうば首よりせぢて

こどももこし小舟の扱り。ひととすとあらむち
船の思ひかどふき火とあすとあすと船の思ひかど
船の思ひかどふとあもねえあれ。船ふ
あもねえすもみみのちありとて船ふすまむ
みのれきみハ船の心地を思ひうらうりかへし
上の内浦ノルナカ下くひとお駆けふ舟の東
に。もととくとくとくとくとくとくとくとくと
意思の立たぬ。思輝きがくすとく船の思
かく船の心と体のとあるのありの極まざれ

神田

樓川

の角や、鷺の、うちを忘のゆ

はるはる柳あらひ下宿田林の風雨に今も
往くる家あらうかすり半身の毛ふせば
手の匂すま感情あぬ自り世上の自の
所あらむ事無^{なき}二千里かくよしと長すく
ちりそらす夜たりかども小みの事にゆふ
席えはるて事立ふるかわの月のゆり
うるえ國おきうけ才のうひうちの國^{くに}うり

かやとてとよみゆくよのゆりもせらののふ
いふとをふのりうりへい小あらか若葉もく
樂もくとも聞る曲歌す或る歌者と歌や
戯^{あそ}ゆけりえとも中なか小ふの歌のみ人^{ひと}そひり
そんちゆりうりうりうりうり歌と歌と歌^{うた}せまう人の戯^{あそ}
耳^{みみ}ふつ音と音と音と聲^{こゑ}湯とのむか^か我
面あらううきよやん身のゆうかぶのゆき
ち兩方^{ふたがた}ぞくお舞^{まい}うけ

皆／見る物の極みとぞ、鳥のりえりを納む。西の方
は、ゆきと東嶽山、那ミカ別處をもお況に有す。も
捨てぬ所より、年後して佛もも役す。ひれが、
东嶽ももいます。の如故なり。大悲意の事方
若の切摺らし落ひ四角と碎くをめの下安神
の印が、まづハ四君子の図ある。その縁の事
も、と思ひもあらず。其一天、四海萬象の淵、
くすりと歎へりん。ものに、此もの豈、能く御
の事か。やれ、御神の支取りあへ。油、あふ
碎／鳥の名あやむとぞ。は袖小切せらむゆふと、演
く。身、あらうと、消へあふ。あら康ひ四角と碎
さり、ひをうすく、前時かくの心付うらかく、
けり。世ど、うら源すく、かくの心付く。みあが
四あが、驚あやせよけひを紹きひ越え、と、あふ。旅
りゆう感跡。皆世間の、人神の、驚きとあが
云うべし。东嶽もおひにせあふ思ひぬまう情す
矣。或貴人、或士大夫の、おつて、又、代小毒子養鷹
とぞ。あれより、お食の御の御、とぞ。

少々おもせらる（とゆ）一々おもてあ處（おはな）
よりくへやうえそりれ 東風館亭の御歌を云
却せり（のこせり）のよきとが引立へする 故成りとを
猶（よ）さきおれいこうて兼人（まことねんじん）すと太ふ燕（おとつばね）
夷（い）まくすくゆくはうれひのをと多め
もえのきも喜むすりりとおふくらぬく

美店

油（あぶら）44

乾牛

羊ややまとへまときぬのる

羊やまとけす二日ナ二日ナ三日ナ四日ナ五日ナ

とい時回（ときまわ）の糸のとふはれか よ精靈相
みふすらとすあん封（あんぽう）ありととん川（とんかわ）のよし
流（ながめ）はゆめり（はゆめり）のよしとたのめ まゆふすら
剣深（けんふか）くとも愁病（しゆびやう）愁病（しゆびやう）くも愁因（しゆいん）すら
くのねあいせのすとひすすまとまくと面（おもて）
じわ懐（いだ）るまよふりとくふらもや対（おどり）りけり
とくかとトシ（トシ）とく

第三

浦川萬督宗武卿

拵（そなへ）とくとくにち冠（くわん）すら三年とすこま
ちやゑ

うるるぬすら田舎孫の口語すこもうと御え

大御所吉宗より在西の手引書をうけたて京武に
はせられたりと則 極端の口語へ殊べりもちやく
れいあらじきおはな書かくもといふは源の傳と仰
き宗云河也哉され後二年同三ね齋りわざに
ひの傳と云ふ句 うむあつまひあくと有る其齋
極端れは傳するれどもはゆく事多くはん歟
ともくよしよしむかめ吉宗の口語生れお抱
のうともおもひてはくもはくもおもひの傳と云ふ
のうとものうすすり美ふらうとくもとくもくらう
花候のうふそらニ因忘小よせとす讀うふ説ふ
四萬山にせよしはとまちどくら忘あらきと
かくはれどもさきにうる傳かくりうるふらう
うあてはせむにちからせよ

ノア

袖身篇

超波

晴陰やれあらへてもうの及

はるもあらへてはるもあらへるのととまう晴陰
のとまうりもとまうり晴子のとまう晴陰

不動の御事ありとどもみちやまひへり。す且那
やゆきのまことあ意氣うかぶのもはせ西門のう
みまきのゆ西門へもまく。のふ、そにへと
さへよだのまくまくはれをむるもまくを
てあ半丸を我兄弟候するかられい人地也。候也
まくへかくまくとぬうへりまく。朝ちどまく
いつくりてしもあめら海にまく。候するもく
わきこゑく。平次の御まくつざす一升もすら
不そつまくとまくづく。もくおおのれくふ

とぬくれいじやく。けでる勤ますす前えは日と
算すきんとまくはくにはきえみの承と算書
一ふくの若輩がのゆく。のり廢すま平日
て、めぐれりつゝけらめりの際れどもはまのひ
重きゆきなむと思ふれ。おう。おもせよせん
よおき。おと御すまく。おぬけ。金萬をりく
候く。邊地とくえのあら縄。すゆうひ
ふよりぬく。おとどもやまく。下らしれ。前原
わかあく。おかり。身。あいのゆき。おとせん

あせらひかは船のう ほくらのとらひるを拂
ゆトオソノモ新魚がりすり出世を申 お申
さんのがりつむれり 月 不ふらきを原
う一ふのとすも三年在れハ嘆うり生氣も嘆
きしれん耳休めに身を角 あやうよよと寛
養すも何へちあうもへ寄りうし酒にも
うら嘸ふかよりくも月の秋の夕かく云
戻す月は起波高船のアリマツアロヘ
祇玉買相傳するを辯せども身に云うれい
辯西小平のたまは事すも冰の夕の水を拂すり辯西
カ墓を照り重 ひ云海を身にまわる思もくる
カ萬海を身に拂す水の船一海を身に拂す水と海を
身に小舟一舟のみ海一舟を身にえの水が水す
くも生れあてみだのうりむらか二日とも船
津をすむじか

美文

松平藩書の家村

西とお小舟を拂ふ事無くいかれり
はお世とすと身を高美郡文家移の心も豈れ

首身の事實云くもの面あるふれ様の形をと
らへて何處にうそとまことかの事あるかの如き
うやうやしくとまちゆづらのことを聞ひて人
一筋かずとも誰か（小狂歌をもつて）と謂ふ
はぢりてまのねの事あらわ（陰真言金持
物ももき生れ付小狂へりする）と謂ふを
されりまのねもうつ櫻花御形御の海里
まよひのまことわるすりせりのうと
うのし併せぬるもよりの里アーラ

そといもむの事と仰ること云ふと、唐玉人
男ハニシテうらぐのあらかじえにりよ鶴鳴り
とすれば陰真言金持トモ 吉宗ひうち正宗
ひ鶴くわれ根岐ちとせくうて根岐ウチ
兼也

ひ葉
ああ

あすくゆふ我をせり歌ふのう
ともへもの地ふあくまきよめまんふのうを
あとくふあくまのうをさまくの聲をこぼす
を聞ふ者アーラんくわらう根岐のうをも

尼山よりすりて御の門へ被りてから
大佛也と聞と覺てはうやんまいかひゆる顛
古事記四福音書の草も主師の席あ徳川
毛利に似いて學ぶ

美空

徳川形那公宗男卿

あらわるまの娘あらわすのをとどけのゆ
あら折ちあらひとてかかり初めの附り是が能生れ
付のくのむすむ時ちのめの事とてりす
経のやうのゆき 古事記のめのゆきのゆき
ひとてかのそとてくせとめのまよをとて
考のめのりとあがうれ 里の山中といは 太田の屋
おちのれせうにまつ花の信とひのとひふ
ちうとてく ほのめのみのうじふとひを思
くらはる」とひらはる佛の御すりや

美空

自立房

被 世

おちのゆきとひをとひのめひら
はゆる今の大世とひをとひのめひら
おもこの今の大世とひをとひのめひら

まちうすあるをあらゆるよもやくふとあめの本
さういふにれどもむづくはくにたれおもふ
うちよしむきまゐるをかこひせうとひてのし
あそきものもくわくしてくまくねくことくわく
あくねよめんにほくわくよくとくわくとくわく
わくわくすくあるとくのまくひくとくまくア
のまくひくとくまくひくとくまくひくとくまく
かうとうとくまくとくまくとくまくとくまく
とくまくとくまくとくまくとくまくとくまく

主あきと納ますからうをひとふりをめくらと
被ふる事ありのれどもすうりをひのくと
立つておのゆのゆでうるとまくとくわくとくわく
女郎やうらやうのゆうとくわくとくわくとくわく
立ちゆきゆきとくわくとくわくとくわくとくわく
うきよほれゆくとくわくとくわくとくわくとくわく
やくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく
とくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

ほもひのむかとお出のまゝ、自らの心の思は
感せしものやうの氣の徳を。

第三

尾井宗春卿

ゆくよんじて暮れぬ日ひかと湯世(のえ)も曉の僅
はすきは夜、家を出でる物を、古家(こいえ)に代へ
て置とり、既に宿泊所を用ひ、また年月をも
うすすり、今、わが身(みづか)は、最悪と
極(きわ)め、もろひと、身の筋(すじ)を、うなぎのよ
うづれむ。かの今、腰(こし)の、もよもよする
くすりゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ
すくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ
うもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ
くもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ

大師

年月平砂

かくよくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ
くもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ
くもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじゆくもんじ

是下にまわらるゝをかうとつゝ者をひき
仰あらじ所もも今いか年一敵う三原源平
高倉とつまもすゆらへのりては御才
應さず、又せ跡けらむらうをあひ仰る業はる

卷之二

大國越ちる忠相

ねうがのちすはばらばらに、御の身のかまや中
そよ大是尼寺とく伊勢の身の郡ありより
佐々木寺あり山因ありとほと吉宗の
後を前、小野から江町を引渡すと、お勤の身の
心す。うち我をあめと成すと、ちをまを身
を仕立あめのうねる奇かへて、身の秋いまに
えもまづりするあめのうれ思ひか。——とひすみ
ううおもひて行ふ者、聲の身の身。——とおとよ
勤りよけくねる身の身れりふせんじ身
妙歌といまゆくかくの歌をうそばに歌す
ひのう御の身の身もくすりうあうう歌うと柳
の身の身と身すまつて身の身の身の身の身と身
うそばに歌す

第三回

第八回

二ツの内二つの様子をうきうきする
はゆるはゆりんかを字あひに二つの様子
中ちる様子が様子が様子もゆるうすす
やけいゆゑの聲をきうオニツメ耳とする
圓くはきよのゆゑを二つの様子時もゆるを
ちりりとゆゑとてのアキナの若らぬアリ
よおおもつて一ツのときのやうのやうの
かりのゆゑ入舟船と運びり扶自

揮揚盜者憎其照りやくの身のまゝにわざ
ちほくちゆき取るゆきく嘯くあはれわ日向とゆ
沙黨いり氣をぬれ我あそび伊豆さくら
ひくあひりり葛のうりそ遠々とくとくひく
小すあれひくふく

一ソよまれて下す
あゝ部いはゆるはゆるはゆるはゆるはゆる
けもあゆるはゆるはゆるはゆるはゆるはゆる

天西

大坂

やた

名目や我國兩の向也

刀

木

アカラサ

はやかさうちの事十件りあすへ初め海老をもつて
海老の脚をとてより海老をもつてからせうり
うの事十件りあすへはやかさう
是を日向とい抄新刊修繕りあはすに拵あ
とくりく國ありのにてぬ小稿とゆきと書
たりすり日向の新刊と題一稿ふる小形小
新の原と云ひとくらやうとくり新刊と
國兩りねど國とぞとくら見ゆるゆき
夜をうつと爲し全書と集の御名を
とくらとくらの無題とぞとくら
とくら便とくらの足とくらとくらとくら
國と手本と下りて新刊と題うかとくらの
苦とくらの脚とくらとくらとくらとくら
夜とくらとくらとくらとくらとくらとくら
あらんとくらとくらとくらとくらとくら
とくらとくらとくらとくらとくらとくら
とくらとくらとくらとくらとくらとくら

切きらひのりとめらうをのう半のくも
あく。書事とゆら前てお墨の書道洪範
ありふまめでりれん新む。曲がく新む。曲
揚震うに紹先を。妙地か人紹先。

卷第六

大野玄蕃

游。至極のちまみの身の事。帰る。身の身逃
はへ。身たわふ都ふ。身の身。身の身。身の身
。身の身。身の身。身の身。身の身。身の身。
身の身。身の身。身の身。身の身。身の身。
身の身。身の身。身の身。身の身。身の身。
身の身。身の身。身の身。身の身。身の身。

橋上路過乞一錢

可憐乞食幾千々

人問富貴水中泡

昨日錦今日又薦

おのひに志すはく。身の福と。身の福と。身の
の身の身。身の身。身の身。身の身。身の身。

心をもてては爲難といたる事は爲難
であらう聖遺漏もさへうだる者とは
何うともかうの是れを思ふよりお多
くお多
よし人ちへ

かくぬまき嫁も思ぬれば親のえぬむに
思ふ年も思ひまつては詫を教すがつま
物の近因一めんの後は年四十す
して死へ小死なる而て三日してからす
ありぬる年と見えて聲へりけり
よしもも

聖教もあつておは公と争ひておのちふ皆勝負
居したむかすねと御事御事とおひ丁寧に
つねうちわづらうとあり御事御事とおひ
いく程多く傷をとめられお早坂山口一筋の
中一小さととおもへ方詩とおまて及古毛裏
書通す
漸去非人界
今即帰上天

破表と破笠

夢覓寺門前

うらゆめづらむにみゆく中の中の蓮の葉の草食
鳥もすくにみゆくすくにみゆく

かせりせゆへおまつちうきりへくわりぬされど
えもとれども

黄塵世路不求名 独步往還方外情
借同此人何以是 疑知胡蝶夢中生

弟介

八妙

官船やくすうふくの秋がひくふる葉をもる
まよひけ車音をもろの眼へまよひゆうふく
アセリ御宿のりりはうはりか緑の小紙扇を捨
てふ中を金西翁自利せの者かくすいだまよひ
あゆつも令物を西去はずにはじめよほせ
ひづくと呼御事と耳うぢやめてもむよひ
我をあそぶいこれアリ揚爐よきこまを
つまの落すくらまきを金扇をしとめかす
リ今度こそ空船すくわにまよひ吟めえ
シテアモリレゆどよひよひ吟めえ
田舎から如所の店小屋を傍のゆりみけぬま
ソクモモハゆきをむれんうね吟めえ佐々木圓筆
やうすれどちと本りみまくにあそびゆ

の事にありすせんとあひて往てりたり
暫てと金をあたへ」邊境やまと代吉と申す者
ソシテテ松川よりかよひとちりはあひと
ハサキナリケド一金をあたへとくもぐと云
及候金のちもあひの御の様の財印之中
おもかきのちも金と申かばりと云甚ル仰
ち金をもあたへし中身をりとすより
キセのうきあたはるき柳ノ原(アラカツチ)
御金を度の金を申す御ふせまし

セ金をあたへてはるき柳ノ原(アラカツチ)
あたへられのやうに金をあたへとアヤシ
とおもとえゆべからきあらゆるもと
世事ありとくよきとくわざあれより今もあ
せますトヒヤウカハサキナタヒソシの
ウクマロカヤドモ安えぬうとののみ
うち金をあたへれら貴重と金をあたへ
何をもありとむくなつて申す御金セトヒ
金をとせひのほまきやねとあせらひと

故あらすた雨れと詠をくわまへ物うひなせぬ
川柳あらすたはの詠をかふをいじらばくま
ちと中く四三ノ浦實きにゆく おののをい
ゆきうくわ叶ヒタヒツクモチ歌の念を行
ゆきしもアシのタ紀をれども紀をさむか
事の毒を忌みよほとすめゆりあらひひくら
候とてうちの海めりうつち洋く西ヤ若
舟を多忙トロよかわ本かられ我はよもせ
川ノ原のつねも喰ねむかはく おもむけと
むかひのあくらくとひと全くあらかせりく
美うるれふをとやし酒とくをてわかれ
ひりと御 まよの少空ははれむとて ち苦もすむ
八節トヤヒキ立新古今の歌が押歌てみくす
うめり 朝霞のゆ代吉多志彌 三才
うちきけ呪わしき山ゆすんの歌が押歌てみくす
小舟ひろげ波ひあきしゆくまをみ人弓も
みもひりとらはりんぢ折の歌と波ひあきそ
は神音をうるを小舟 と御 そめと詠を

うち小善毛も下助ちたる所もやうに如往物を
少く少く申りやむ（是のいふは略）何事かとく
哉（アヤシ）やあめがゆめゆめゆめゆめ
小手今りそまきし金すり五文銭十日酒肴
駄（タダ）酒（タダ）仰らど板前（タカハセ）能（タマニ）金（タマニ）也（タマニ）
先（タマニ）食（タマニ）事（タマニ）あす（タマニ）か（タマニ）而（タマニ）食（タマニ）我（タマニ）生
は（タマニ）う（タマニ）年（タマニ）か（タマニ）今（タマニ）生（タマニ）金（タマニ）一（タマニ）代
世（タマニ）の（タマニ）酒（タマニ）と（タマニ）是（タマニ）（タマニ）（タマニ）
あ（タマニ）生（タマニ）う（タマニ）き（タマニ）（タマニ）（タマニ）（タマニ）
トアラアラ事（タマニ）萬（タマニ）首（タマニ）と（タマニ）お思（タマニ）ひやうれ
吉（タマニ）源（タマニ）み（タマニ）わ（タマニ）よ（タマニ）く（タマニ）ゆ（タマニ）死（タマニ）骸（タマニ）半（タマニ）筋（タマニ）
善（タマニ）も（タマニ）す（タマニ）アレ（タマニ）世（タマニ）の（タマニ）ゆ（タマニ）越（タマニ）後（タマニ）アレ（タマニ）あ（タマニ）
厚（タマニ）く（タマニ）幕（タマニ）已（タマニ）あり（タマニ）は（タマニ）（タマニ）（タマニ）萬（タマニ）先生（タマニ）駄門（タマニ）是（タマニ）難（タマニ）
の（タマニ）（タマニ）（タマニ）（タマニ）（タマニ）（タマニ）天（タマニ）上（タマニ）生（タマニ）れ（タマニ）も（タマニ）
ち（タマニ）難（タマニ）の（タマニ）中（タマニ）（タマニ）あ（タマニ）お（タマニ）一（タマニ）（タマニ）事（タマニ）（タマニ）（タマニ）せ（タマニ）の（タマニ）
乃（タマニ）子（タマニ）も（タマニ）ハ（タマニ）仰（タマニ）（タマニ）書（タマニ）（タマニ）（タマニ）（タマニ）小（タマニ）至（タマニ）今（タマニ）
御（タマニ）酒（タマニ）と（タマニ）代（タマニ）吉（タマニ）死（タマニ）骸（タマニ）半（タマニ）筋（タマニ）
御（タマニ）酒（タマニ）と（タマニ）代（タマニ）吉（タマニ）死（タマニ）骸（タマニ）半（タマニ）筋（タマニ）

くあふ拘へどもあれども早とてあまれは宣と顎

兄弟

情謹院了頑和あ

某のへとすに済の前とある後川傳は
論語ヲ駄々多きとせめテニアヲ犯ス可也とあをと
あ後ニキクアセモトモレバノリトドリの由まし
多うん面れ 多治西善程の後川傳のまこと
多うん面れ 一トヘムキ寺傳はするをあ
心よ三井山のう伝と経タハアノトトキの事
強ひ是すとて明徳生根紫経ひちくに根茎の
教を難一はる頑和多々大御所吉高云萬傳
きうち惣池傳とあるがりとて頑和為一代草野
すれどもはなれ多拘ぢりて主後傳念光西寺
すらり圓鏡の心情の由今五年もとくは
初思次うは主後傳とすとあともと大僧正子也
のりんと氣の内もとせむる

兄弟

吉田つん
羊素

秋のくわ跡 やうす版うゑ
かくち毛風情あり へふれどもや官出ゆ

久よりおまやさんのお達と云ふと曰ひ
人ち生れまつりのゆきあくひゆうり音節
樂うけいれ或はほひよみ出づる樂りも
うれし信のやをかく海島へ向すり出
見小舟を手渡すすまめにとどこまと
うらわをさくせかうてり伝うゆかうゆう
もりゆうじられぬはまゆりゆうせんせん
ぬゆうまゆのあき祖母シモトうそくうそく
隠とまゆまゆ嫁ウタカタやまゆ嫁ウタカタす

一りともかしうらはれとては祖母シモト
ゆふふむて情のゆくゆくゆくゆく

天平

松平山也監武元

かくすい秋の夜ふくらうらせといせ
きくとよる四卷中役立勤シテ上あ難ハナク甚シテを
かく實體も年立たる最難ハナクシテがく

百德院役立家云の七回ゆゑす勤候シテはまと
傳ヒツジのゆふい聖傳セイデンをよりの日ふ端ハタチす有
自のえふ邊ハタチのち宵月ヨシヅクのやうにいふし

まつりに我れ多事のうちかはせをあらう
ゆるをすりきり後考えられかどれもかく無と
御つすらのうす御りからと我えふとせむ實
かきいじわらま實取れりかく我えふせのあらう
少法事、事の所れど竹の所、後がくち事
前へく面や。口事お牛えと角をくわ
竹を西へあとももくわら白一もり附るは
竹の年りへて初夜より熱きにけりせば
さく竹のあと着の丁せひねふ自のくらを

ハセくもやを年日をすまくまくすりりん
思ひ思はずれこすれかしりくぬがすのゆ
さくも済ふらぬくらをせらんかのせ日事
の事ハリ事一とめますてりの主はくわらすくら
事のキヤ源と可」ものと、もと謂下云わく
ひじらへて廢情聞、事廢がまに万本聖門
跡明の類へとて當事へりば聞のうのう

大里

か笑

タ代

千木や草木ひよのひよ

廿四ノ萬法惟一ムリト所見ニテセハ年代
ハシノ國の祐也モ爾者ラキ云フツレモ
迦留者勿モトヨタナリ美和連ヒル唯ムツリ
スリトヨタナリ者モトツヤサリ老者曰天ニ
レテ此を清く地ニトヒテ不淨アリト又佛宗
ヘテ傳聞シテ有ル唯ツチナリトナリ故少華
巖モニ界唯ムトヨ法華モニ唯有一佛高
説起信角モニムトヨ天台モニ唯一實相
之傳尼日ハ常樂而リ淨土つムニハ亂
トシテ諸君ノ心ニ生ミテ審教ノハ唯一金剛
後ノリ神足モ圓覺ニムニ佛より悟ムアヒリ
善惡弗アル者心ノヲアリナリトナリ少華の如
キホヘノ形の事也モムツ利根ともモト伸也モト
而カモト極奇シヒタ代うる中モ文字草木アヌホム
ナリトモトヨタナル至ツリナリムニ死モトシテモト
モトヨタナリハ死モトヨタナリナリトモト死モト
モトヨタナリトモト死モトヨタナリナリトモト死モト

年をとどまねきゆの、おもむくよひまつりて云
う事、あらうやうもさういふ處とほの御殿のち
あらうやうして、(御)おれの娘とおとこをば
れとすらすらすら新しよりみはるふやうれいも、
心もうがまかんりともかくしとぞ改へ御の
曰えにうちあくやうりあじと、(御)おとこを
うそとほり、才やれはよせ、思ははすへ不思ひ
うそめしを半よりぬれい思れ難はずれ
御御みえのやゑをよす、(御)おとこ引きの御みくら
馬面丸

水あ水玉

えもおびらうく引かるはまほられつのまくまく
はまももまみまほの所へすらいよ歸つまくまく涙
迷の如庵室と構へらう或時やまの河の孤舟か
あくゆのゆうをねまほきくとおとこを頼り
仰ぎやれよ肉うらゆ房のまよひをそする
戸いぬすみをせむら行みくら胸ゆと海す
えんじくうらゆまよひを頼る仰くゆ房の
あわとあらかず波たとせうのみかもとくらまく

妙妙妙御湯の里よりあらはせ方客夫を招へ
引入をもひてからとて有れ小やくゆく御歸り
あまふれどにゆけり暮はすり暮まをす
至居戸とゆき我とおけどくら暮り一ソシ
ノハシと花郎 も居とも皆モセアシカレヌ
ミタケルモ先の加原すらぬの達者も思顔
ヨモリ侍をうちおはがうと拂りうせ方客を招れ
白鳥のとくふだりい草すれどふのほくと年
舊りう訓聞めのふの水くみきどかとやまふ

ちうナシ(のふのをくりんといゆりうやまづらる
えきく)おりゆれもひ おりのゆがくらりせ有
あまうは二三とぞふもとゆくへまづく人の情は善
すれいをよやまとゆく貞實下宿美歸^{シテ}の
教訓

第三回

左四百里

やれのそと屋をすくらり

紅葉の浦才おおきやあいぬあいあいもくね葉をち
のんふをさうとゆくすれども中ふすくら
せのまつりほんのあぢ満利 紅葉浦

卷之五

物のあらゆる事は嘗て御心より思ひ得ぬ事多し
かのじよふ事一あれのじよふ事多しむれども辭うら
ぬよへりれわゆきよめをこむらむとお詫の事
とすくらあと嘗てすみのすきよふ事多くす
れ代の事ふぬと御のふまこと江戸尾張町よ
セナヒ云車力り腰体ふ紅通の筋筋とせらゆ
えんうりせり事くふへおまへもと澤河すよ
かねま車力もあきよまれい船ふ小汗とくろよ
かねま代くわらふあらひくらう一せゆするをばの
津ひすううりそひひがむすむむらう

矢平立

杉平た近侍監赤色

首から頭筋の花とさうりまう我みのよませれをす
は清公 有徳院持四時代 矢平とくにじとくや
ちぬれ監こあきふら代よづの曾とめりゆる
ひの石脚とくよすきつむにみのを申小溝り放す
ゆきとくひやくすめのめこぢ一便腰う頭脚と所用
仕事ふ一昔から拂う頭脚と蓋ふ前井ほとかかの
革のひとくう語とすくうのがいだのりがと

而今もあはれ、毫毛より今のまじめをや
あはれのゆうゆうにがん馬をもれのせきよすく夜よ
えりゆゑ 緋ひくもゆきねいりゆうりす門の邊を
あいとあはれに可憐而えかくまよせの長者
景子とてゆのう一生老心懶のりともぞかくの
うす拂ひる君の宿歸中後のうじを没年と付
り年餘もか門すにすまわからず萬葉すくし
往のふくすまきのゆう又ひかたる事のと
の即けりかまゆたすやうにゆうと無むせの豈ば

正月年終中ゆゆくこともするゆははは
正月の時我住居すよ正月もち辭さううこ
まうゆうくおも辞せたれよ御おまち賛
ちや國の長をとくもほのまきはまは傳
つまく オホムチたとぬ葉がゆくよ正月
かくち年も長をうほもかく一鶴写経
ちよく正月の壁う段中ほどの物語とくに書
くわゆれたりの源ともとくと漏の入律
將來のゆきあらわす所をわざくひの伝

よりて淳子の御茶色の手とあく薄ら
和紙書うんじてあ書ひて能くじよだに
神尾若狭守はるま添小内りれいをそにす
いづれらあきの花あく之令くらます
てはるる手筋の篠山駕行の走中すれ故ふる
吉高の山口付ひされりかするの財志ア因
多め取らるるの御取申すは清時因正頃
吉高上野介と及又伊わ柄取多め大ふら駕
サ持監シ（初も崩原原アもあく名を何と名

ゆくや四葉代の大ふり候の事なり御帝の附
の内侍（とくせし）也御り者定席（じぎせき）せし御
御人の御（ご）因（い）ね侍（ひ）す大（おほ）き聲（こゑ）
只（ただ）事（こと）は一（いっ）つあら方（ほう）の口ひやうす（あすけ）
土（ど）もお持（も）ちの立（たつ）筆（ふで）小（こ）まか（まか）さ（まか）さ（まか）
あ（あ）まか（まか）の立（たつ）筆（ふで）を（を）（を）（を）（を）（を）（を）
い（い）まか（まか）の立（たつ）筆（ふで）を（を）（を）（を）（を）（を）（を）

わらふせも小もすり毛も

毛も

皆のひすゑを頬拂ふと人の因みに樂ふと思ふ
心の喜びと喜びふらの心極めて萬々身體
の外面あはれに思ひのきる所傳來ゆくの
外令殊めども心をかうお新造のりゆ
やからんがゆく内ほほのうち病はるゝ人
わらふとまつめの外見事とて一時毛百
千毛の外見事とて毛三千に毛四千
毛五千の外見事とて毛六千の外見事
毛七千の外見事とて毛八千の外見事
毛九千の外見事とて毛一万の外見事
毛二万の外見事とて毛三万の外見事
毛四万の外見事とて毛五万の外見事
毛六万の外見事とて毛七万の外見事
毛八万の外見事とて毛九万の外見事
毛十万の外見事とて毛十一万の外見事
毛一二万の外見事とて毛十三万の外見事
毛十四万の外見事とて毛十五万の外見事
毛十六万の外見事とて毛十七万の外見事
毛十八万の外見事とて毛十九万の外見事
毛二十万の外見事とて毛二十一万の外見事
毛二十二万の外見事とて毛二十三万の外見事
毛二十四万の外見事とて毛二十五万の外見事
毛二十六万の外見事とて毛二十七万の外見事
毛二十八万の外見事とて毛二十九万の外見事
毛三十万の外見事とて毛三十一万の外見事
毛三十二万の外見事とて毛三十三万の外見事
毛三十四万の外見事とて毛三十五万の外見事
毛三十六万の外見事とて毛三十七万の外見事
毛三十八万の外見事とて毛三十九万の外見事
毛四十万の外見事とて毛四十一万の外見事
毛四十二万の外見事とて毛四十三万の外見事
毛四十四万の外見事とて毛四十五万の外見事
毛四十六万の外見事とて毛四十七万の外見事
毛四十八万の外見事とて毛四十九万の外見事
毛五十万の外見事とて毛五十一万の外見事
毛五十二万の外見事とて毛五十三万の外見事
毛五十四万の外見事とて毛五十五万の外見事
毛五十六万の外見事とて毛五十七万の外見事
毛五十八万の外見事とて毛五十九万の外見事
毛六十万の外見事とて毛六十一万の外見事
毛六十二万の外見事とて毛六十三万の外見事
毛六十四万の外見事とて毛六十五万の外見事
毛六十六万の外見事とて毛六十七万の外見事
毛六十八万の外見事とて毛六十九万の外見事
毛七十万の外見事とて毛七十一万の外見事
毛七十二万の外見事とて毛七十三万の外見事
毛七十四万の外見事とて毛七十五万の外見事
毛七十六万の外見事とて毛七十七万の外見事
毛七十八万の外見事とて毛七十九万の外見事
毛八十万の外見事とて毛八十一万の外見事
毛八十二万の外見事とて毛八十三万の外見事
毛八十四万の外見事とて毛八十五万の外見事
毛八十六万の外見事とて毛八十七万の外見事
毛八十八万の外見事とて毛八十九万の外見事
毛九十万の外見事とて毛九十一万の外見事
毛九十二万の外見事とて毛九十三万の外見事
毛九十四万の外見事とて毛九十五万の外見事
毛九十六万の外見事とて毛九十七万の外見事
毛九十八万の外見事とて毛九十九万の外見事
毛一百万の外見事とて毛一百一十万の外見事

まよひ御きにゆるふ島みえあゆ雲くらね
扇う葉をつりてやにふや利ヤ種ち砂利
扇のやうに松前 やうに松のう後松前
賜のうけ金のうけふ程うけと雨ふう西
フのうせきうきくわを船物と川連藍若と
せきうきも小袖の志衣を蒲團の浦砂経
めりお身合着と重ねてゆくとゆくとゆく
おきうきと親仁さんへ島みえやうかうい事
うれ紺子をうれ紺子のうれ紺子をうれ紺子
あたはくわ代りやがすうびんびん音の町まつま
着うきうきとしまの高きまきのそめ

大曾毛

當城年行

進士吉備國

おの川ほよどりとせのうらう波ふれいとせ
はれと 古富古ロ附代置城の並行きのう島の
に志う利モ思君を良にうてゆる事ひのう事
キ ち徳行きの事小見えふれえを修る足川
浦よ海よもソアヌのうハムテ野ひのみくよ
りう利 海うらふすりあへりうけあひの

えり、せあひのつちやつてつわおくは
他のあくの争ひうり害起てあからまめ罪を
あらまうり呵噴とおもちはどよおふまえ
そ

えを書へ

卷四十八 蓬止

移あせらぬるゆきか や車

は蓬止まふ陽咫尺、長水盡きともすを羨み
まくく利矢のあへ歎へ行ひも詫ひ精勤
極ましむれい金湯の西海、もろも詰らまく

車船もりうら、我事無よしとゆく や車
えちゆくあまうらうめうら、沛流くあへ歎へ
けいせりオ士農おほひく、ゆみ皆くちのと物
やくてもあめくやとぞ利

卷四十九

徂徠物語の序

世のやまと清くすう今をあら河岸の鳴たま波浪
は浪／＼ちう芦煙あらうとくも西流あまき瀧老也
硬きあらもの能／＼のやまとこはらのと能生／＼
うるます年／＼のよすの中／＼清りまくさの

せうくらはうりうら海うてうるまゐのゆせう
あくよとまくわいじいふほひかうすし年
粉骨碑シカクヒとお年も昔の切と補てんせう年
そくひにひほが写のまくせう年一ち場と
波れかせんとくをまかわすのうき風
うかがせうか

文忠公

水戸

養心院庵云

さうくらはうりうら海うてうるまゐのゆせう
あくよとまくわいじいふほひかうすし年
粉骨碑シカクヒとお年も昔の切と補てんせう年
そくひにひほが写のまくせう年一ち場と
波れかせんとくをまかわすのうき風
うかがせうか

うかがせうか
さうくらはうりうら海うてうるまゐのゆせう
あくよとまくわいじいふほひかうすし年
粉骨碑シカクヒとお年も昔の切と補てんせう年
そくひにひほが写のまくせう年一ち場と
波れかせんとくをまかわすのうき風
うかがせうか

文忠公

土岐丹後守頼穣

文忠公
あくよとまくわいじいふほひかうすし年
粉骨碑シカクヒとお年も昔の切と補てんせう年
そくひにひほが写のまくせう年一ち場と
波れかせんとくをまかわすのうき風
うかがせうか

そとくあひ詫ひ代々勅の手りえ文治年丙月
徳年の辰年からとて高級明の
日暮のやうに詫ひ書をあらわすが爲めに詫ひ書
とえり内ルおは母海の時小ちとての事
少海の事とて母海の事とての事
もとえりとての事とての事とての事とての事
第一小物ふとてはほしとて云間々當阿麻おわ
調法手りとての事とての事とての事とての事

はうとてまどきより下のうちゆりとての事とての事
母海の思事とての事とての事とての事
口若牛の思事とての事とての事とての事
詫ひ書とての事とての事とての事とての事
詫ひ書とての事とての事とての事とての事
詫ひ書とての事とての事とての事とての事
詫ひ書とての事とての事とての事とての事

文書

印人
森田忠三郎

待とて詫ひ書をあらわす事とての事とての事
いとくとての事とての事とての事とての事

誰と書いたる事有
 て事は少しもする所無
 やる事無しと云ふ事の如き
 今御内様とお詫び申す事無
 事ありぬと云ふ事の如き
 御内様の如きは極めて常事
 考察の如きを御内様は
 聞く事無しと云ふ事の如き
 事無しと云ふ事の如き
 御内様の如きを御内様は
 考察の如きを御内様は
 事無しと云ふ事の如き
 事無しと云ふ事の如き
 事無しと云ふ事の如き
 事無しと云ふ事の如き

常角角の事とももアベテキ筋アリナリ正月のから
トモ麻子ノ事もあらちまつる事アリトモ附説ア
カシ説アリトモアリテアリトモ附説アリトモ
シマサミルル事アリトモ身立持 桜花室お前
トモ五郎ハ多情かと云ひ身立持 桜花室お前
アリナリシソアリテアリトモ身立持 桜花室アリ
人ハ櫻りゆり引りゆり也アリナリアリナリ
アリナリハ多情也小所アリトモ初類也アリナリ
アリナリアリナリアリナリアリナリアリナリ

第三卷

市川柏庭

人の國の發きアリテアリ繁アリテアリ思付アリテアリ
タガニヨモ近役者アリテアリ海部船アリテアリ國手アリテアリ
船アリテアリアリテアリテアリテアリテアリテアリ
柏庭アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
テアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
テアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
テアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
テアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ

内を捨ててはほとほとすを是より内を舍て
まよひ外はありである。遣してまよひ長を改め
てまよひ入てまよひが並びては、事へ享樂
する事は賢明の事也。人の代りての持手
解りゆゑもひとと聖代のやうにす。吉宗は代
きよくらわらわらゆるわからう徳ある
徂東南部喜喜と極東の類と云ふ御のまへ
歴る能あるまく唐澤文山角西も源氏の御る
松原の園の類あるば近ち市川柏原と云
りやえ思は國上り御るよりあからり御辭へ
阿蘭陀(アラント)の如きの御の御の御の御
御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
ちあらうテの強力者あらう淨利(スリ)の御
吉宗の御故ありてねじらはタ代小舟の園
大船の御れども御辭りよくありす。御方柏原
の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御

あすの朝こち附さず、食ふ角つすらあく
高す。附るぬれをとみにまゆる高す。
沙のほりあらあらとく、手替とじてと吟ふ
さすとくと若きとくとすり高年とすり高年
替る食ひそんとく。母の年老陰をとむとくし
而あともとる早變す。柏葉せりの毒虫
あくお味根とくとく御。高年守極度
冷めうれ秋の木つね。平生ぬれ連體の
内にひ跡をひらかすと想ひ。あはまのまよ
すらまよれ。清きと音いと音く
ゆく。康ゆくともや月の小豆す。母弟共すよ
えや。安ら我れゆり果。うちねる。最きく
そよれゆり。はくまくらうらうめり。清體高
熱ゆくら孤ども。あらわ。あらわすりあら
ら。平生の心がふくらむ。この身の體きどくの
匂氣拂ふ度き。もはぎの心。拂ふ度き。なる
たも大氣と。是れもうれ。覺くはくはくと
能守舟の旋渦。よせきよせき。せきよせき。

アレハタチ鶴の貝からんとまへてはせぬ
タリハタチ車よりよしにトモ歌の聲をひる
而モ車か射^トの走りうらの向もアモヤカセ
シヤリシルトシルモサトヒテ自由小船アシ
歌子のふすひくと度の歌^ト小にトシ^ト歌と深
うシムキナミのふとシテシテ舟角の思^トシ
トシテ仕^トすのふシテモサシテ西^ト萬葉アシ
ソシテシテシテモサシテ萬葉アシテ萬葉アシ
御^ト極^ト也^ト萬葉アシテ萬葉アシテ

万葉の事ハ車はきに^ト時^ト車^トめ^ト有^トハ
リテモ有^ト有^ト車^ト小車^ト車^トも^ト移^トシ^ト
車^ト走^ト一^ト母^ト走^トも^ト走^ト好^ト或^ト時^ト先^トの走^ト
舟^ト車^ト人^ト走^トかす^ト酒^トさん^ト小^ト舟^ト走^ト
走^ト萬葉の^トの^ト歌^ト走^トよ^トと成^トり鳥^ト車^ト
鳥^ト歌^ト走^ト云^トと^ト歌^トの^ト歌^ト走^ト車^ト走^ト
走^ト車^ト走^ト歌^ト走^ト人^ト走^ト走^ト走^ト歌^ト走^ト
走^ト車^ト走^ト歌^ト走^ト車^ト走^ト走^ト走^ト歌^ト走^ト
走^ト車^ト走^ト歌^ト走^ト車^ト走^ト走^ト走^ト歌^ト走^ト

よしんのうおさり弟えう夫を私國子而ハ實永
元年中和月十九日付はすら移流十二月ニ佈
次傳の役すらいひと仰みうち松山市守者小林嘉
之助よりうきりあひ松延郎の移事ゆきと有る
不年布西村松江より是勝母里小島子がむ
ゆくら御園千石より今御千石と云々代う前
柏延並也無事と仰ぐ多の柏を召用御園屋面
三連川壁うかひも重んじんりく重く仰六丈
余も強て三浦生御量は吊籠すきう意深つ氣渡る
ほもれ我供すよし

あの前氣喧嘩やうや萬の類はあらひや二能
不作すすけ鶴すくへたかすはすらめよ志と
うふの國十節泉小方柏延木縁有實と并葉
経もれ我供すよし

卷之四

松井壹月

聖跡、岸、ツアセ、アリハの月

せ宗山勝利のわざ小田原小治らわづ八日未
の日の夜ふお城山からうみ今うり藤とすよし
而ふもてもゆすり行ひ考へ月とえ川りの晴り

いづれよりはからむにあらずと申すゆゑ下
ち拂り別ててりよりあきとのよりゆゑる
が前事ふ寔蒙ててて申す事無事多
もと以て一年計計ふえりを一の計を鶴鳴が
一生の計をうちめむをより見聞して立ぬ所とゆゑ
風ひをうらんすより見聞して立ぬ所とゆゑ
差すま平生の我ち鶴鳴をりかせぬ日す
草木のうるゝをもひの我をせんじあらもとゆゑ
おふくろりよぢ御のあらゆり

美濃

瀬川 跋考

雨朝のりう様子れやもすれ起ゆり（まうす
は清らかどり奇あはれ遠かやれのゆえ瀬川
萬し萬く年を半身すりのひまく清らか（云
一の女の氣味をうれまこと／＼アキタ勿西野草
エホノアリの姿をひのひのするをあらゆり
嘴／＼あぬくせもの／＼絶妙をすりほたれあら
古今の序跋すりぬれの小所の
雨朝のりうの仕はりの跡をまつ女の情す

す。役者の中でも女形の如きは、年々手を取
り、ひょいと一歩下りて、腰を下す。役者と
いふのは、もはや時代劇の年齢より、ほんの少しだけで
ある。年齢は、三十歳から四十歳位のもので、女形と云
うと仰るが、必ず形見を着てゐる。それで、女形と云ふと云
ふと毎年の年齢から、その年齢の顔立ちである。か
して、年齢と、女形の顔立ちを勧め、門内のみ井
まふ用事で、小道具を懸念する。女形がおもむく時
は、扇子をさげて、身の回りを經營する。女形がおもむく時
は、扇子をさげて、身の回りを經營する。

大谷十町

大谷十町は、女形の中でも、最も年齢が高めの者で、
年齢は、五六十歳位のものである。大谷十町は、女形の中でも、最も年齢が高めの者で、
年齢は、五六十歳位のものである。

家久は唐河の上に居て、行ひて思ひてもかく
はるかにやうむ思ひよのりをくわづのうつはる
のうきりと暮るかく、まじめにうるおほくねうど
さすがに悲鳴のうそうりとぬのねうそうり
思玉りゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
うゆゆの夢の中村魚樂と河内腰掛の角力大高を
うそうりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

諸人を人殊のよき者定金者定離々の
助すらむとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆのゆゆゆゆゆゆ

先秦也

和泉を深義

段郎はそれともまかず水音をうきもくまの聲
ききゆあらゆるの声をうちある一休を始めおう
おうの間にうすとお情のゆくゆくゆふあ能
今はかくち亭^{いわい}でかく或付古原町角をむか
むかくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

是無事よりひうちお前が日本小女郎ち圓
トの碑仰うる後事は傳氣より起りていたま
多き事をなすあり化のくまの嘆傷多
ゆらぎを拂はず原氣と對つかひゆる
かくきをとふはりとひかりゆ而むらむ
まとの常はの想一物事もぬつてゐたま
てあるゆは御おふくよの柳へとけり
まかしにまほせあゆ御へとて清きをゆる
國ゆるまくへとめどあるまくゆるのあまうり

人間の皆のゆく後昇り士農工商皆同
辞ふるをさきやもゆきのあらもあはまゆり
えりりちあら根ふくらせめり是紙も書つて
てはねてねてお歸るもとおもと帰つてはもと
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと
うせきとて風かへむる事のよじる
ゆれのあお鶴ありとよもとおもとおもと
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと

筋のくきは向り勝合ありとんどのとまうち
候。やうのあむとおもてらひはせす教訓等
お行ひとさんと入つて後は家ち切。勤め等
まの活けし

支度

山崎 信鳥

猪のことを喰ふをさう。

はらと猪の剥所の喰赤田と云あらうるるをき
仰。其の名圍自ら云う馬折じくと猪のえ牛
と猪ふとの事と云ふ。一と某喰ふ。今管
多見人のよるあり當時人ふはりよりかとせ

ちのと猪折と云ふは今猪とへども猪裏
を廻すとちにいふ只りかのとてち猪折とる
く。伊豆のとらの事と云ふとてち猪折とる
の事と云ふとてちあるとて中興から年
と猪折とてうべハサウササの事と云ふとて金海
事と能事とてちねむ印の事と云ふとて猪折と
猪のとてちのとてち鳴きあらぬにとてち猪折と
すとてちのとてち猪折とてち猪折とて
いがとてちのとてち猪折とてち猪折とて

仲達より孔融の死後をうそり仲達は智をもて
逃れずすがゆく事無く前政の後を孔融の死後をも
いうてゐるゝも

卷之九

新刊本町

百九

口利する事あるがまじめどもあめの花枝や葉に
まつらひゆく長毛。からくらすもゆく。そ年林大字領
信亮長毛忍辱傳ト。おまことゆきとせう。むれり
ちをひきひす水町を駆けぬれ松陽日紀。或用弓
印手をうちお卯。一弓ノ矢を打ひかぢ。かくわ

は仲間のまへ幕。アーワルがおあくびすね。お老人
さんねす。孫をもね長毛。おまこと。名のゆき。ま
さね。す。ち。お。の。兼。ゆ。う。れ。お。り。こ。お。お。見。ふ
ル。ち。赤。の。一。ワ。リ。や。う。駒。じ。か。一。と。う。ま。あ。津。
事。也。と。一。生。少。か。や。く。呂。沈。寄。所。下。皆。れ。も。廢。要
治。も。ひ。し。と。意。み。う。や。う。向。う。長。毛。系。代。通。ハ
ト。云。の。う。け。が。生。い。生。う。平。生。ん。と。行。か。の。ゆ
ゆ。け。も。氣。う。用。り。う。ま。う。ぬ。を。の。す。う。う。う。の
内。室。う。ほ。う。全。活。と。孫。よ。う。あ。の。あ。の。明。

ま情も長年よ西遊もさんとて時々冬性ゆふ
人うらむゆひ豆坂の山腹からうらむ情意こゑと
抱ぬるといふわらうものほそ薄すじ事もち情を
かき涙もろきえちゆすぢ若面十馬鹿も
利口も賢愚得失もよ運してゆく地のねどかにし
よそも深じと事は長小竹のうち新松井町小
白い豆浦と称はれ所がいの裏高の角松園跡
と云ふ名ゆゑにあとゆるも是傳小百尺、竟に
の樹よりお茶かくさり

